

# 通信小海

## 憲法九条は日本製

牧師 水草修治

ゴールデンウィークで西へ東へと民族移動に忙しい季節であったが、五月三日は憲法記念日であることを思い出しておきたい。特に新しい首相は、改憲・軍備・靖国公式参拝・首相公選制といったことも大胆または無謀に論じる人であるから、私たちは目を覚ましていなければならない。

改憲論者たちが目の仇にするのは、憲法第九条の戦争放棄条項である。「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する

### 【今月のひと】

「剣を取る者はみな剣によって滅びます。」マタイ福音書二六五二

手段としては、永久にこれを放棄する。前項の目的を達成するため、陸海空その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。」

改憲論者はしばしば、「昭和憲法は米国からの押し付け憲法である。日本国民は自主的に憲法を制定すべきである」と主張する。そして、その彼らの言う「押し付け憲法」の象徴的部分が憲法第九条なのである。けれども、これは無知による事実誤認、あるいは意図的な事実隠蔽である。なぜなら憲法第九条の戦争放棄条項の発案者は、日本国総理大臣幣原喜重郎であるから。

一九四六年一月二十四日正午、幣原首相はマッカーサー元帥を訪ね、約一時間半会談をした。この会談の内容について、マッカーサーは一九五一年五月五日の米国上院軍事外交合同委員会聴聞会で証言をしている。少し長くなるが引用しておこう。

日本同盟基督教団 松原湖高原教会 牧師水草修治

牧師館 長野県南佐久郡小海町大字豊里一六六一

〒三八四一一三 二六七九二四七七六

郵便振替 五三 六一六八三

黄色い十字架 パロの五十メートル北  
ヤナシヨウの向かい

### 集会あんない

日曜日

朝礼拝 午前十時から十一時

夕礼拝 午後八時から九時

水曜日

聖書を読む会 午前十時半

祈り会 午後七時半

\*初めての方も歓迎します。  
\*個人的相談にも乗ります。

「日本の首相幣原氏が私の所にやって来て、言ったのです。『私は長い間熟慮して、この問題の唯一の解決は、戦争をなくすことだという確信に至りました』と。彼は言いました。『私は非常にためらいながら、軍人であるあなたのもとにこの問題の相談にきました。なぜならあなたは私の提案を受け入れないだろうと思っっているからです。しかし、私は今起草している憲法の中に、そういう条項を入れる努力をしたいのです。』と。」

それで私は思わず立ち上がり、この老人の両手を握って、それは取られ得る最高に建設的な考え方の一つだと思つ、と言いました。世界があなたをあざ笑うことは十分にありつることです。ご存知のように、今は栄光をさげすむ時代、皮肉な時代なので、彼らはその考えを受け入れようとはしないでしょう。その考えはあざけりの的となることでしょう。その考えを押し通すにはたいへんな道徳的スタミナを要することでしょう。そして最終的には彼らは現状を守ることはできないでしょう。こうして私は彼を励まし、日本人はこの条項を憲法

に書き入れたのです。そしてその憲法の中に何か一つでも日本の民衆の一般的な感情に訴える条項があつたとすれば、それはこの条項でした。」

この会談については、日本側からの証言もある。幣原首相の友人枢密顧問官大平駒槌は「(幣原首相は)かねて考えた世界中が戦争をしなくなるには、戦争を放棄するという事以外にはないと考える、と話し出した。ところが、マツカーサーは急に立ち上がつて両手で手を握り、涙をいっばいたためて、そのとおりだ、と言ひ出したので、幣原はちよつとびつくりしたらしい。」と回想している。

幣原首相はもともと平和外交の旗手であつた。ところがその後、日本は中国において「自衛」と称して侵略を続け日米開戦にまで暴走してしまつた。その苦い経験に基づいて、明瞭な戦争放棄が必要と考えたのだらう。他方、軍人マツカーサーは太平洋戦争の残酷さを経験し、かつ核兵器の登場という事態を見て戦争の廃止以外には人類を滅亡から救う道はないと思ひ至つたのである。彼が日本を武装解除することの都合から芝居を打つたのではないことは後年、彼が米国上院

で戦争廃絶を強く訴えたことからわかる。憲法第九条戦争放棄条項はメイド・イン・ジャパンである。このことにもう少し日本人は誇りを持つてよいのではないか。

主イエスを逮捕して十字架にかけようとする人々が迫つてきたとき、弟子のペテロは剣を抜き敵に打ちかかった。すると、主イエスはおっしゃつた。「剣をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。」(マタイ福音書二六・五二)このみことばの真実は、歴史が証明している。

筆者は寡聞にして幣原首相がクリスチャンであつたのかどうか、彼が主イエス・キリストのことばから戦争放棄を発案したかどうかは知らないが、そのスピリットには主のみことばがこだましてるように思えてならない。

# キリストの墓石

さて、安息日が終わったので、マグダラのマリヤとヤコブの母マリヤとサロメは、イエスに油を塗りに行くことと思い、香料を買った。そして、週の初めの日の早朝、日が上ったとき、墓に着いた。彼女たちは、「墓の入り口からあの石を転がしてくれる人が、だれかいるでしょうか。」とみなで話し合っていた。ところが、目を上げてみると、あれほど大きな石だったのに、その石がすでに転ががしてあった。

それで、墓の中にはいったところ、真っ白な長い衣をまとった青年が右側にすわっているのが見えた。彼女たちは驚いた。青年は言った。「驚いてはいけません。あなたがたは十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのでしょうか。あの方はよみがえられました。ここにはおりません。」

マルコ福音書十六：一 六

日本で墓石といえば、墓の上に立っ

る記念碑めいたあの石のことを意味するが、今回お話しするのは主イエスの墓穴に立てかけられた、封印石のことである。

紀元三十年四月第二金曜日、午後三時すぎ、主イエスが十字架から取りおろされたとき、それまで自分がイエスを信じることを隠していたヨセフという人物が勇氣を出してイエスのなきがらを引き取りたいと申し出た。そして、自分のために用意しておいた墓に主イエスのなきがらを葬った。

イエスを処刑したユダヤ当局とローマ総督府はイエスの墓が盗まれることを恐れて極めて厳重に、この墓を封印し、番兵までつけた。今日エルサレムに残されている横穴式のその墓を考古学者が調べたところ、この墓の入り口に立てかけられたこの円盤状の封印石は、厚さ六十センチ、直径四メートル一センチもあったことがわかった。というのは、この墓石が立てかけられたあと、石の両側に鉄のくさびが打ち込まれたのだが、その鉄のくさびの切れ端が岩壁に残されているからである。この封印石の重さは、なんと十三・八トンと見積もられている。ところが、この封印石を左右から固定した厚さ三・八セ

ンチもある鉄のくさびの先はボキリと折り取られてしまっているのだ。技師によれば、これ折るには、約六十トンから八十トンの力が必要だという。

しかし、事実、主イエスのなきがらが葬られた翌々日の日曜日未明、あの鉄のくさびは折り取られ、墓の封印石は動かされた。だれにこんなことができただろう。番兵たちは自分たちが寝ている間にこっそりとイエスの弟子たちが来て墓石を取り除けてイエスのなきがらを盗んだと証言している。しかし、人間が音も立てずあの鉄くさびを折り取り、墓石を取り除けることがどうしてできよう。あなたは、イエスの墓の封印石を取り除けたのは誰だと思っだろう。

## プラスアルファの心

「わたしが娘に『どうかあなたの水がめを傾けて私に飲ませてください。』と言ひ、その娘が『お飲みください。私はあなたのラクダにも水を飲ませましよう。』と言つたなら、その娘こそ、あなたがしもベイサクのために定めておられたのです。このことで私は、あなたが私の主人に恵みを施されたことを知ることができますよ。」

こうして彼がまだ言い終わらないうちに、見よ、リベカが水がめを肩に載せて出てきた。：彼女は泉に下りて行き、水がめに水を満たし、そして上がってきた。しもべは彼女に会いに走つていき、そして言った。「どうかあなたの水がめから、少し水を飲ませてください。」すると彼女は、「どうぞ、お飲みください。だんなさま。」と云つて、すばやく、その手に水がめを取り下ろし、彼に飲ませた。彼に水を飲ませ終わると、彼女は、「あなたのラクダのため

にも、それが飲み終わるまで、水を汲んで差し上げましよう。」と言つた。

創世記二十四章十四 十九節

これは族長アブラハムのしもべが、ご主人の息子の花嫁を捜しにアブラハムの故郷に旅したときの出来事である。しもべは、主人のご子息にふさわしい嫁の条件とはなにか神にどう祈るべきかと、荒野を行く旅の道々考えていた。「ご子息は面食いだから美人であることだろうか？ いやいややっぱり健康であることだろうか？・・・」目的地に到着するころには、しもべの思いは定まつていた。アブラハムの故郷の町の井戸に到着すると、しもべはただちに神に向かつて祈つた。「その娘は、私が水をくださいと言つたら、『どうぞ』と進めてくれる人であり、さらにプラスアルファして『あなたのらくだにも水をのませて差し上げましよう。』という娘であるように。」と。

彼の祈りはただちに答えられた。それはリベカという娘だった。聖書によるとリベカはたいそう美人だったそうである。けれどもリベカの最大の美点は、プラスアルファの心を

持っていたことである。「水をください」と言つたら、「はい、どうぞ」と水を差し出すだけでなく、さらに「お疲れでしょうから私がラクダさんにも水をあげましよう」と云つて、すぐにサービスできる心。しかも、それがおせっかいでなく、ごく自然であつたのは、彼女が、日ごろから相手の必要に敏感に答えたいという優しい心を持ち、人のために骨惜しみをしない習慣がもつ身になつたからであつた。

「ラクダにもお水を。」こんな小さなことが、彼女に思いがけぬ幸せをもたらすことになつた。

自分の利益になること以外はなにもしないということを信条としているような人は枯れた泉。頼まれたことは、苦情が出ない程度にやつておこうという人はため池。しかし、人に頼まれたら、なにかプラスアルファしてあげたいという人は、こんこんとあふれる泉。神はこういう人を祝福しないではない。